



平成26年9月8日

卓話 『アジアの中の日本』

東京大学 名誉教授
早稲田大学アジア研究機構 招聘研究員
公益財団法人日韓文化交流基金 評議員

伊藤 亜人 様

皆さん、こんにちは。今日のテーマは、日本はアジアの中でどう自分たちの位置を自覚し、理念と展望を持つかということです。私は大学で人類学の研究をしながら、もう一つの専門に韓国を選びました。私が誰もやらない韓国の研究をやるといったとき先生は大変喜んで、日韓国交回復後間もない中、私のためにソウル大学から3人の客員教授を呼んでくださいました。大学院のあとすぐ助手になり、1971年から毎年、韓国の農村に行っておりました。そういう恵まれた環境で40数年韓国研究をやってきました。

その頃の韓国は、戦後初めて日本から来た若者には厳しい環境でしたが、私には知的な刺激にあふれていました。農村の家はほとんど藁葺で、土と木と石で出来ており、鉄は釜と農機具3種類だけ。韓国研究は白紙の状態でしたから昔のメキシコや中国の農村と比較して自分の頭で考えながらやっていく、そんな研究スタイルでした。

本日のテーマでいいますと、日本人には見えにくい問題がたくさんあることをまず我々は自覚すべきだと思います。特に韓国とは驚くような違いがあります。日本はある所に住めば、私はこの街が好きだとか言って、そこに長く住みますね。地域は重要な意味を持つわけです。しかし韓国では地域というのはあまり意味がない。人は自由で、その時その時、自分の都合のいいところに身を移します。場所とかモノとか職場に拘ることにはむしろ否定的です。職業や技も二次的なもので、内面的、精神的な思想や理念を重視し、それを言葉で表明することが大事なんです。経済でもそれが表れてきます。日本の場合、経済は地域と不可分で、経済は地域において実現されると思うん

ですが、逆の立場からは経済は数字であり地域はむしろ妨げと考える。実際、そういう経済観を持てばスピーディーで的確な判断ができます。しかし着実性とか持続性は弱い。ですからこれは人の生き方とも関係します。

日本ではモノに詳しいことを評価しますが、韓国ではむしろマイナス。焼き物一つを見ても、日本人は手に取って、この釉薬は、なんて蘊蓄を語る。韓国ではそういったモノと人の関係に精神性を見ませんが、日本ではお茶やお花のように精神性はモノを通して表現されます。これは論理的に説明しにくいことです。つべこべ言わずに手を動かせと職人の親方が叱りつけるように。

現代の国際社会で、例えばJICAの人たちが国際的なコンセッショナルリーでプランを出すと、理論性がないと言われてしまう。しかしJICAの青年海外協力隊なんて、まさに実践と具体的な経験の蓄積ですね。しかもそれは開発途上国の人たちにとって非常になじみがある。ですから日本が論理性の欠如を一方向的に否定されるだけじゃなくて、それを受け止めながら、日本人の生きざまの持つ意味、普遍性を自覚してそれを生かすのが、日本人が生きていける道だと考えています。

これは韓国研究を通して私が到達したものです。

